

## 美 と 善

深 作 安 文

我々が、何等か美的經驗をなす時に、一廉の道德的觀念を喚起する事がある。例へば、一の悲劇を観て、其の主人公が、残酷な運命に弄ばれても、少しも屈しないで、遂に最後の勝利を占めるのを見て、道德上の因果關係、即ち、善は終に勝ち、惡は終に敗れるものであると云ふ事を感じるのは、之が一の證據である。又、我々が道德的生活の或る部分に於て、没我的狀態となること、恰も、美的享樂の頂點に達した場合に、我を没するが如き事がある。通例、大暴風雨などに接して一種壯美の感に打たれた場合には、誰しも我を忘れるものであるが、何か大きい道德上若くは法律上の罪惡を犯して、遂に深く自らを責めて煩悶に煩悶を重ね、甚だしきに至つては、我れと我身を殺して迄も、其の苦境を脱しようとするのは、之が實例である。斯様な事を考へて來ると、我々は自づと美と善との間に何等か交渉、關係がありはせぬかと云ふ事を、思ふのである。

我々が、通常、美感を起す對象の成立ちを考へて見ると、之が製作者、即ち、藝術家の念頭には、それによつて名譽を得ようとか、利益を得ようとか云ふ様なさもしい考のない場合が普通であつて、所謂、藝術の爲めの藝術と云ふ意識の下に、製作を行ふのである。かくして出來た作物は無論、嚴しい法則に支配せられるのであるが、打ち見たるところには、一向に、法則の支配する痕跡が見ぬないで、一抹の筆にも自由の心が通ひ、一刀の痕にも、自然の精神が動いて居るのである。要するに、主觀的にも、客觀的にも、無企圖的自然的であると云ふ事が、藝術家、若しくは其の作物を支配する要件である。此の事は、我々の道德的生活の内にも亦、見出される。勿論、尋常の人の場合に於ては、斷えず義務意識が我れを支配して居るのであるけれども、之は決して道德的理想的狀態といふべきではない。なせかなれば、一つの義務を果せば又、他の義務が起つて來、之を果せば、又他の義務が生じて來て、殆んど際限がない。其の結果、生活に自由がなく餘裕がなくなるからである。其生活に自由があり、餘裕があつて、少しも義務意識の束縛を受けず、恰度、水の流れる様になめらかに自在に行動して、其れが自づと矩を踏まない境涯を、善の極致となすのである。孔子は、晩年にこの境涯に達せられたと云はれて居る。

又、他の點で、善美の一致を云ふ事が出来る。或る學者は、美といふ觀念は、變化中に於ける統一であると言つたが、これは此際味ふべき事と思はれる。なせかなれば、美的觀念を喚起する對象は、部分と部分との間に調和があり、全体と部分との間に統一があつて、見事に一つの全体をなし、色なり、線なりの感覺的媒介物を通じて、十二分に作家の偉大な理想が躍動して居るからである。變化中の統一、之れ確かに、我々の頭腦に美と云ふ觀念の喚起される必要條件の一である。彼の寫真が、繪畫よりも一般に美的價値の少いのはそれが、單に、人力で以て、強ひて自然界の一部分を切放した丈であつて、嚴密な意味で一つの全体を成さないからである。隨つて心ゆくまで藝術家の理想を、それに宿らせる事が出来ないからである。この調和と

統一と云ふ事は又、我々の道徳的生活の中にも存するのである。通例、善と許される行爲を調べて見ると、第一、之を成遂ぐる者の心中に、調和、統一が存するのである。即ち、動機と、品性と、若しくは、意志と感情との間に、少しも葛藤なく、衝突なく、一情緒も全生活の一部をなし、一欲求も全人格の發現となり、思ふ所は言ふ所に一致し、云ふ所は行ふ所に一致し、内外透徹終始一貫して大なる調和と統一とを現はして居るのである。即ち、斯様な人格には、光もあり、香もあり、試に打てば鏗鏘の響もあつて、鮮かに、美的色彩が看取せられるのである。理想的人格の生活に於ては、美と善とは、まごかに融和して居るのである。古ヘ 그리스民族が、其の誇の一つとして持つて居つた「美而善」と云ふ言葉こそは、この様な生活を形容する爲に存したのであらうと思はれる。斯様に考へて來れば、無企圖的と自然的、調和と統一、この二對の事柄は明かに、美と善、言ひ喚へれば藝術と道徳との兩者を繋ぐ鍵鎖であると思はれる。

無企圖的と自然的、調和と統一、此れ等は、道徳の美的要素と呼んで可いのである。この美的要素は、果して何處から生じて來るであらうか、自分は、是を、専ら趣味といふものから生ずると思ふ。通常趣味なるものは天然の風景なり、又繪畫、彫刻、音樂等なり、言ひ喚へれば、天然美、並に人工美を、或は批判し、或は鑑賞する力である。簡單に言へば、美醜の判斷力であるといはれる。之があつて、我々は、始めて藝術の世界に逍遙する事が出来るのである。此の趣味は、人類の歴史と共に、古いものであつて、既に原始的人民の間に、之れが萌芽を見出すことが出来るのである。彼等は或は異性者を誘ふ爲めに、或は部下に己が權威を示す爲に、羽毛、貝殻、赭石等を以て、其の身体を飾つた。これは、恐らく、彼等の趣味發動の第一歩と思はれる。斯様な身体の裝飾は衣服のそれに移り、又住居のそれに轉じ、それが、文明の發達と共に追々

に進んで來て、諸般の藝術が起り、今日、文明人に見られる様な、複雑な、藝術的作品を作り出す様になつたのである。けれども、趣味は、單に、美を美とし、醜を醜とする許りでない。一たびそれが、人格に編み込まれる様になると、少なからず、道徳的作用を爲す様になる。即ち、其の人格に潤ひをつけ、其の心情を養つて、人をして高尚優雅な氣品を備へさせるのである。元來、人格なるものを以て、思想、感情、及び、欲望の統一となすのは、單に、その科學的説明に過ぎない。實際上の人格、血あり肉ある人格は、種々、豊富な内容を持つて居る。特に、それが修養の工夫を積むといふと言ふに言はれぬ趣味を帶び、餘裕を備へて來て、之に接する者をして、一種の暗示を感じ、坐ろに尊敬、仰慕の心を起させるのである。惟ふに、道徳と言ひ、信仰と言ひ、之を養ふには、或る程度までは、嚴霜の威を以てしてよいと思ふ。なせかなれば、兩者は、いづれも人生の大切な事柄であつて、爾かして迄、之を養ふ價值が十分にあるからである。けれども、眞に道を楽しみ、神に酔ひ、我を擧げて道に没し、神に合すると言ふ様な、尊とい状態は、是非之を玉成せられた人格の、春風和煦の感化に俟たねばならないのである。而して此の感化は、崇高な趣味をその血肉とする大人格に於て、始めて、期待する事の出来るものである。孔子が、詩を稱しては、「思無邪」といひ、韶を聞いては、「三月不知肉味」と云つたのは、たま／＼孔子が到達した、境涯を、物語る所の事實と思はれる。

斯様な次第であるから、趣味なるものは單に、美を美とし、醜を醜とする力のみ思ふ可きでない。又、善を善とし、惡を惡とする力である。否、それが益々、向上し發展して來れば、何時しか我々を運んで、善惡の世界以外に出でしめ直接に、大なる天地と一致し眞個の實在に合体させるのである。季太伯の、問、余何

意栖<sub>二</sub>碧山<sub>一</sub>。笑而不<sub>レ</sub>答。心自閑。桃花流水春然去。別有<sub>二</sub>天地非<sub>二</sub>人間<sub>一</sub>。の句の如きは、この邊の消息を物語るものと思ふ。人若し一たび此の境地に達するといふ、我が心即ち、天地の心であつて、些の撞着も、亦少しの留滞もない事は、恰も清い流れのやうであつて、其の、思想なり行動なり、何れも、無企圖的、自然的であつて、調和もあり、統一もあつて、美と善とは渾然と一致するのである。「ヴィクトル・クーザン」は、道徳美は、凡ての美の基礎である。此の基礎は、幾分、自然の爲めに掩はれて居る。藝術なるものは、之を發いて更に明瞭な形を與ふるものである、と言つて居る。若し、我々人類の最終理想が、善美一致のものであり、而して藝術と道徳と、何れも此の理想を實現する所以の方法であるとすれば、クーザルの言葉は我々を欺かないものと思ふ。(五月十五日筆記)

山村夜燈 (龍雲山莊十小記之一)

暮色蒼然。出<sub>レ</sub>庭而望。則落霞橫<sub>レ</sub>空。澹澹蕩蕩。大麓之下。孤村燈火。點點耿耿。與<sub>二</sub>岩淵街燈<sub>一</sub>。遐邇相映。如<sub>二</sub>螢火散<sub>二</sub>飛蘆蒲間<sub>一</sub>。亦奇亦幽。

細田 劍堂

青島攻陥後に於ける對支關係

文科二部三年 生田、登地、小澤、佐藤、東、山田

昨年の夏、歐洲の平和は破れ、大戦争は始まりました、其餘波は遠く傳はつて東洋に及び、我國は、青島に向つて、軍を進め、こゝに獨逸と戦を交へる事となりました。其以來三ヶ月間、或は地上に、或は空中に、又海の上に砲火は交へられました。遂に我軍の勝利となりまして、十一月七日青島は陥り、獨逸の東洋に持つて居つた、根據地を碎いたのであります。全十六日には入城式も濟んで、こゝに、一段落を告げました。

青島攻陥後支那では、これを全部還附する様に望みましたが、帝國は戦争の善後策として、攻圍軍司令官を代ふるに青島守備司令官として、神尾中將を任命して軍政を布きました。其後税關問題に付いて、意見や要求の合はない所がありまして、幾分感情の上に面白くない事がありまして、日を過して居りましたが、交戦地域撤廢に關する支那政府の通告は、

帝國をして日露戦争後、行き懸となつて居りました諸問題を、解決しやうとの決心を起さしめたのであります。即ち大正四年一月十八日を以て、袁總統の下に、差し出されました對支要求は、これでありませう。其要求は全部五項二十一ヶ條で内容を見ますと大体次の通であります。勿論、其當時は秘密にされて居りました。

- 一、山東省に關する問題。
- 二、南滿洲、及、東部内蒙古に關する問題。
- 三、漢冶萍公司に關する問題。
- 四、支那一般沿岸不割讓に關する問題。
- 五、懸案の解決、及、其他に關する件。

以上の中、第三項にあらはれました、漢冶萍公司と申しますのは、一つの會社でありまして、漢陽・大冶・萍鄉この三つの地名をつめたものであります。それは大冶鐵山の鐵を、萍郷の石炭を以て、漢陽で製鐵する會社で、我國内地のものとも關係が深い會社であります。

五項の中、最も重要と見られます第一項、及、第二項につきなは詳しく其内容を調らべますと、